

創作少年少女小説

う
ら
か
み

浦上の旅人たち

今西祐行



浦上の旅人たち

金魚行



NDC 913

創作少年少女小説

うらかみ

浦上の旅人たち

いまにしきけゆき

今西祐行著

実業之日本社

1969年

272ページ

21.5cm

本文9ポ活字使用

小学校上級～中学生むき

著者の了解により

検印省略

うらかみ

浦上の旅人たち

1969年 6月15日 初版発行

1970年 6月15日 14版発行

著者 今西祐行

発行者 増田義彦

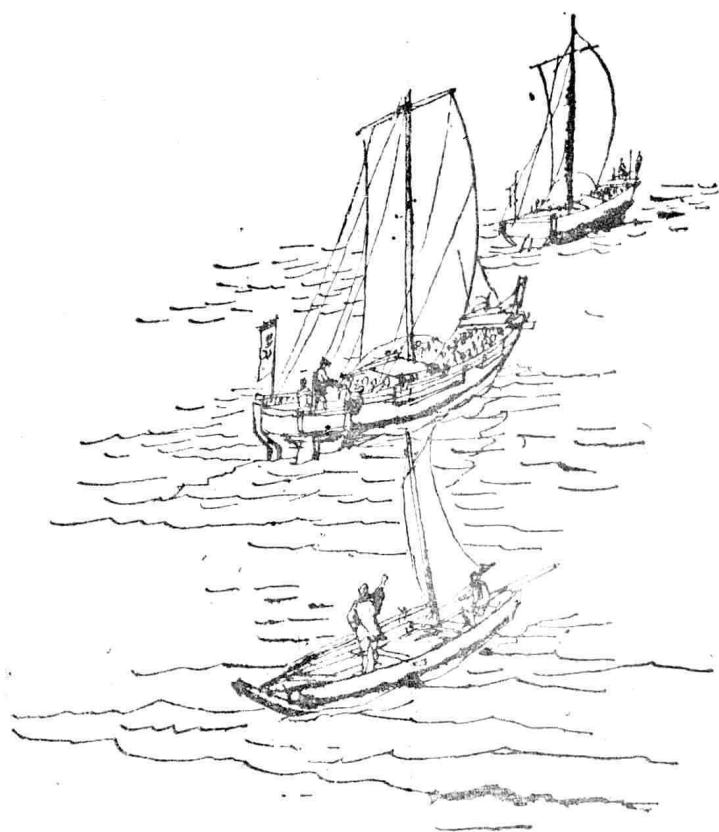
印刷所 株式会社 佐藤印刷所

発行所 実業之日本社

104 東京都中央区銀座1-3-9

TEL(562)4311(大代) 振替東京326

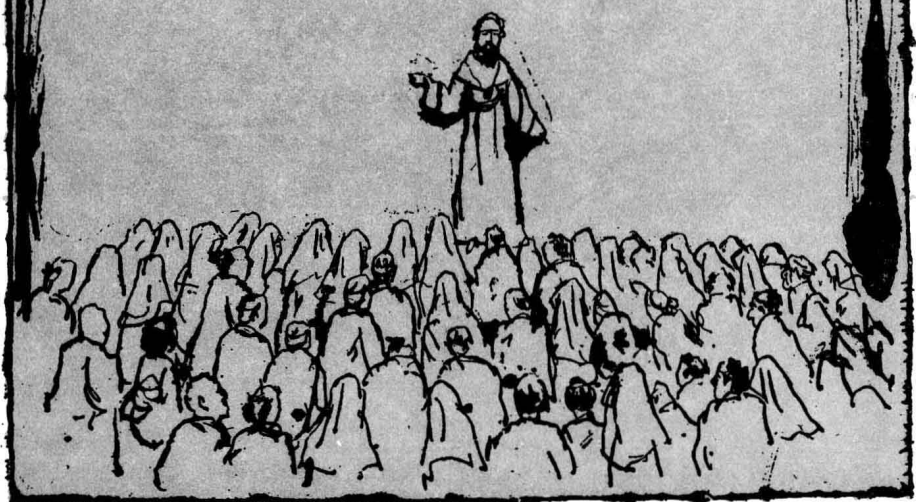
定価 580 円



もくじ



14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
小島の春	父と母と	十字の園	帰郷	夜明け	薩摩びわ	島の十字架	港の少年	人相書	おどりこ草	きつねつき	フランス寺	小さな罪人	吹雪
.....													
241	213	198	179	165	146	120	102	85	66	42	31	19	5



■この本の絵をかいた人■

太^{おお}田^た大^{だい}八^{はち}

一九一八年長崎に生まれる。
多摩美術学校卒。日本童画会
賞・小学館児童文化賞受賞。
児童出版美術家連盟に所属。

1 吹雪

あしのはやい黒雲が稲佐山の頂上をかくすたびに、長崎の町ははげしい吹雪につつまれた。その中を、一団また一団、前後を刀をさした兵士にかためられ、浦上の信徒たちは坂をくだり、立山役所にひきたてられていった。

はじめにきたものは、雪にぬれた役所の中庭に土下座させられたが、まもなく庭はいっぱいになったので、立たされた。それでも、あとからあとからおくりこまれる信徒たちで、すぐにいっぱいになり、午後からついたものは、みなそと庭に立たされた。

つめたい雪は、かたにふりかかってとけると、はだにまでしみとおった。ぬれた着物をきたものが、大勢かたまと、そこから異様なにおいがたちこめる。

「百姓はくさいな。」

検挙の状況を馬で見まわってきた渡辺弾正大忠は、役所にはいるとそういつて、中庭に面した障子をびし



やりとしめさせた。

吹雪にかすむ港のほうから、みじかい汽笛が二つきこえた。すると、いましめさせたばかりの障子をまたひらいて、番兵に声をかけた。

「なんびき集まった？」

「ハッ。ただいま中庭が二百三十。そこにもそのくらいは、まいっております。」

「そのくらい？ そのくらいとはなんだ。かたっぱしからかぞえるんだ。そして、まとまりしだい、はようつみこむ。沖の船がしびれをきらしとるぞ。長谷川はおらんか、長谷川は……。」

おまえなどにいってもしょうがないというように、渡辺弾正は、きょうの検挙に出動している振遠隊の隊長をよぶように、番兵にいつけた。

陣笠をかぶった隊長がきた。

「なにをぐずぐずしとるんだ。はやくせい、はやく。おれの馬をかしてやる。もういちど浦上へいってこい。」

渡辺はいらいらと命令した。

立山役所のまわりには、いつのまにか、大勢の家族がつめかけていた。隊長の長谷川は、馬にのると家族たちをけちらすようにして、浦上街道のほうに消えていった。

明治二年十二月四日、新しいこよみでは、明治三年（一八七〇年）の一月五日にあたる。

『明朝六ツ時（六時）に立山役所に出頭せよ。』

浦上村のキリシタンの家族戸主七百名に、出頭命令がでたのは、十一月三十日のことだった。

このことは、庄屋しやうやをとおして、ひとりひとりにつげられていた。しかし、浦上の信徒たちは、自分からでむかないで、役人がきてとらえるまでは、自宅にまっていることにもうしあわせていた。

庄屋しやうやはこまって、自分の立場を説明し、出頭してくれるようなのだが、信徒たちはきかなかった。

すると庄屋しやうやは、

「おめさまたちは、なんも知らんで、そんげんわしのいうことばきかんが、おふれにしたがわんもんは、みんな鉄砲てつぽうでうちころされるんぞ。きょうもわしら役所へいつてきたが、もう鉄砲てつぽうもったおさむらいが、たーんとそろうつたんぞ。」

そういつておどかした。しかし、信徒たちは、口をそろえていうのだった。

「庄屋しやうやさま、わしらはなんも行かんといってるでなか。あと三日ほどまっておくれなへい。商用で遠くにでいるもんもおるでな。鉄砲てつぽうでうたれようと、どうなろうと、わしらはそんげんことをおそれちゃおりません。みんなそろってハライソ（天国）へいきたか思うとりますで、三日まっておくんない。きつとそろってまいります。」

このことは案外あんがいかんたんにききいれた。新しくできた明治政府が、口では文明開化をとえながら、一方では、ただキリシタンというだけで、浦上三千四百の村民全員を、遠く流罪るざいにしようとしていることを知ったフランス、イギリス、アメリカなど各国の領事りやうじが、長崎県の野村知事のむらにはげしく抗議こうぎしていたからだった。

なかでもイギリスの公使こうしパークスは、知事を領事館りやうじかんにまねき、自分がこれから東京にいつて、政府と交渉こうしやうしてくるから、十五日間信徒の流罪るざいをのばすよう、きびしくもうしいれたのだった。そのあらあらしいやりとりの声は、そこにまできこえた。そして、このことは、役人たちにもつたわったので、三日延期えんぎの信徒たちのもうし

いれも、かんたんにかれたのかもしれない。

パークスはただちに領事たちと相談し、軍艦ドワーフ号で横浜に急行することになったのだが、
「耶蘇宗徒処置取扱」を命じられていた渡辺弾正大忠は、三日めの十二月五日、まだ夜も明けないうちに、振遠隊の兵を二隊にわけ、浦上につうずる道を、いっさい閉鎖した。そして、夜が明けると同時に、村じゅうをかけまわつて、検挙をはじめたのだった。

信徒たちは、きのみきのままで、つぎつぎとひきたてられ、立山役所におくられた。

家族たちには、わかれをおしむひまもあたえられなかったので、大いそぎでたべ物をつくり、着物をもつて役所につめかけた。だが面会はゆるされなかった。

夕方になると、雪はますますはげしくなった。家族たちは追いかえされた。

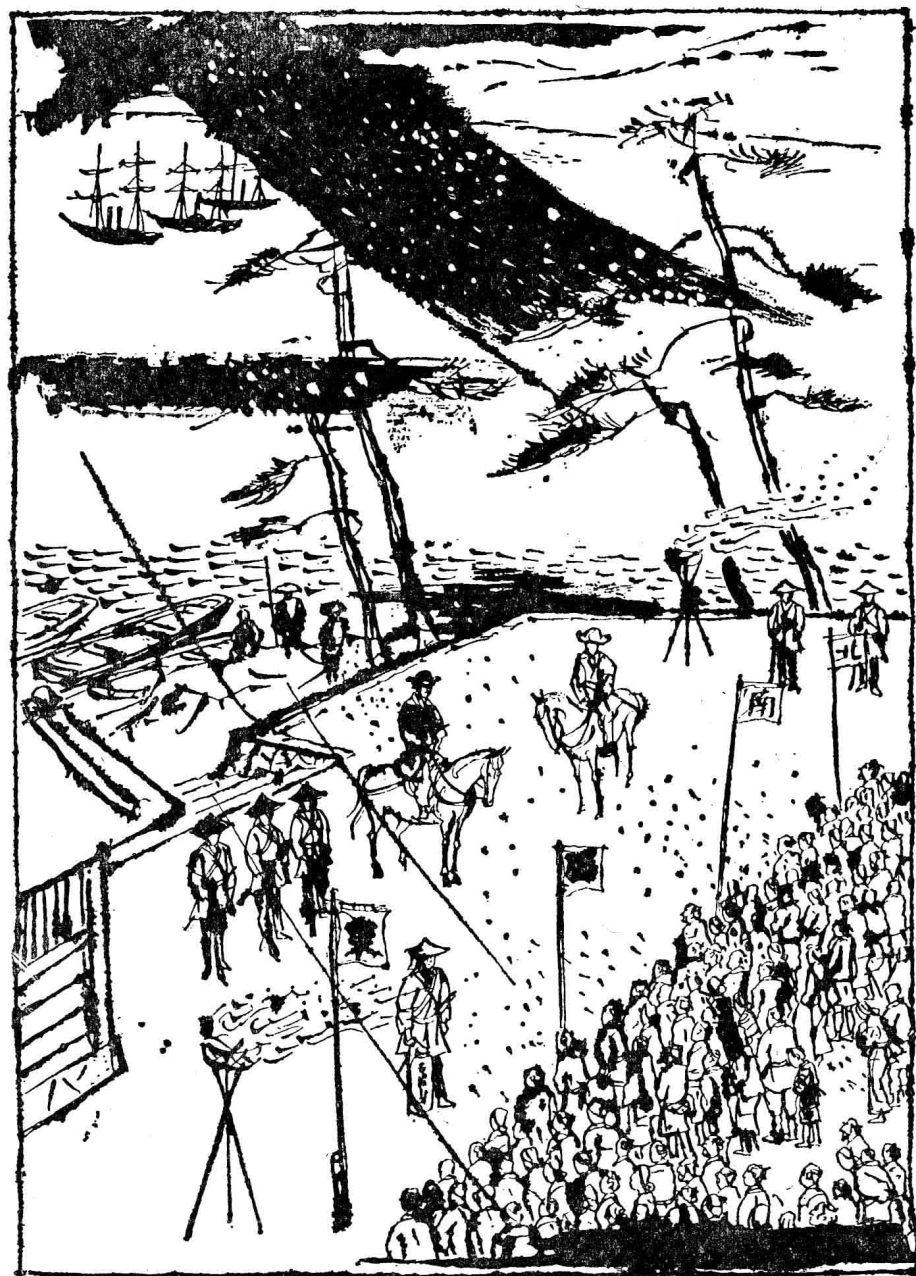
役所のまわりには、かがり火がたかれはじめた。いく人かの番兵がちょうちんをかかけて、町を見張るために、あわただしく散っていった。

中では人員点呼がはじまった。そと庭には、東、西、南、北、と書かれた旗が立てられ、名まえをよばれたものは、行先別に、そのまえにならばせられた。

それがおわると、渡辺は馬にのつて、みんなを見おろし、大きな声でさげんだ。

「その方ども、天下のご法度を知りながら、ふとどきにも異宗（キリスト教のこと）を信仰いたした。当然、嚴罰に処せらるはずのところだが、無学無知の百姓なるによって、高大なる御恩恵により、他国にあずけおかれることとなった。」

そして、ひとりひとりに、一朱金一つづつがあたえられた。



罪人にお金をあたえられるとはふしぎなことだが、これは、外国領事の抗議に対して、信徒たちを罪人として流すのではなく、教化のために諸藩にあずけられるのだという、口実をつくるためだった。

七百人の信徒たちがだれの見おくりもなく肥料や石炭をつむ団平船につみこまれ、沖にうかぶ汽船にむかったのは、もう真夜中にちかいころだった。

その夜、浦上にのこされた家族たちは、ねむられぬまま夜の明けるまでのりつづけた。

きのうの吹雪は、夜になって風がおさまると、音もなくつもりはじめていた。

「マリアさまのおまもりたい。」

信徒たちはそういつて、雪のつもるのをよろこんだ。番兵の目をかすめ、たがいの家をたずねてはげましあうその足音が、つもった雪にけされるからだだった。

本原郷のたみの家では、母親のまん、妹のふみの三人が、ロザリオ（じゅず）をつまぐりながらオラシヨ（いのり）をとなくてすごしていた。

「おかあさん、すこしやすんだら。わたしがおきてますから。おふみも……。」

たみはほんのり白んでいる窓を見ていった。だが、それは雪あかりで、夜が明けるまでには、まだすこしがまあった。

母親の目はおちくぼんでいた。きのうは、一年まえにおなじようにひきたてられていった夫のことを思うにつけても、じっとしていられず、朝から立山役所のそとにつめかけていた。そして、夜になってしょんぼり雪にぬれてもどってきたのだった。

たみにいわれて、母親と妹のふみは床についたが、まだふたりがねつかれずにいるうちに、雨戸をたたき音がした。ふたりははっとして床からおきあがったが、「しっ。」というように、たみはそれをとめる手ぶりをして、そとの音に耳をすました。

たみにはにがい経験があつたのだ。

三年まえのことだった。

そのころ、たみの家のすぐ上に、聖マリア堂があつた。そこからはまったくふつうの、みすばらしい農家だったが、中には祭壇があつて、マリアの像がおまつりしてあつた。本原郷のものは、かわるがわる、ひそかにここにおまいりしていたのである。

六月十五日の真夜中、大浦天主堂の神父が、百姓すがたでひそかにここにやってきて、村のものに洗礼をさずけることになつていた。

男たちは聖マリア堂に、女たちはたみの家で、神父のくるのをまっていた。そこにははげしく雨がふっていて、雨戸をおろした家の中はひどくむし暑かった。

「この雨じゃ、パーテルさま（神父）もおいでになれないのじゃないかしら……。」

そんな話をしているときに、とんとんだれかが戸をたたいた。

たみはすぐに入口に立っていつて、

「どなたでしょうか。」

と声をかけた。返事がない。たみは今夜みえるフワリエ神父が、まだあまり日本語がじょうずでないことに思い

つき、

「プワリエさまがおいでくださったのですね。」

そういいながら、ローソクをかざして戸をあけた。すると、目のまえにあらわれたのは、神父さまではなく、陣笠をかぶり、うでまくりをしている奉行所の役人たちだった。

「プワリエさまとはだれだ。ここには異人はおらぬか。」

「……………」

「上の家がそうだな。」

四、五人の役人はそういうと、すぐ聖マリア堂のほうへいった。

しまったと思ったが、たみにはもうどうすることもできなかった。しばらくすると、マリア堂から、戸をけやぶる音、どなり声、そしてつづげさまに人をうつおもくにぶい音がきこえてきた。

たみの父市蔵が最初にとらえられたのはこのときだった。

聖クララ堂、聖ヨゼフ堂、聖ザビエル堂など、浦上の四つのひみつの教会は、このとき同時に全部しらべられ、六十八人の信者が検挙され、ろうにいれられた。

慶応三年、新しく明治の世がはじまるまえの年である。

たみはこのとき十八だった。しばらくあげられてからもなおうたれながら、雨の中をつれられていった父のすがたを、いつまでもわすれることはできなかった。雨戸をたたく音をきくたびに、思いだすのである。

父市蔵たちは、あくる年いったん家に帰されたが、まもなく新しい明治の政府によってまた百十四名とともにとらえられ、島根県の津和野、山口県の萩、広島県の福山に流された。

浦上の人びとは、これを「旅」とよんだ。
市蔵たちは浦上の最初の旅人たちだった。

たみが立って、じつとそとのようにすに耳をすましていると、泣き声がきこえてきた。女の声だった。

「だれね。どうしなさった？」

たみがあわてて戸をくると、となりのとめが、赤んぼうをおぶったまま、くずれかかるようにはいつてきた。

「おたみさん、どげんすればよかね。もうがまんばしきれまっせん。ゆるしておくれなさい、これから庄屋さまへまいります。」

「なにいうの。庄屋さまへいつて、どうするね。」

「改心ばしてきます。そしたら、うちの人もかえしてもらえましよう。……だまったら、あの人はころされてしまいます……。」

「とめさん、おとめさん。なにをいうの。地獄がこわかないの。あんたなそんげんことしたら。だんなさまはどなるの。その赤ちゃんはどうなるの……。みんな地獄へいつてもいいの。」

たみは両手でとめのかたをつかんでゆさぶりながらさげんだ。

「おとめさん、こつちへおはいんなせ。オラショばいっしよになえまっしょ。」

母親のまんが声をかけたが、とめはきくようすもなかった。

「おばさん、おねがいです。もうとめんでおくれなさい。わたしはだめなんです。うちの人の船がでないうちに……。」

そう思ったかと思うと、とめはたみの手をふりほどいて、そとにかけだしてしまった。

戸口の雪で足をすべらせたのか、とめはころんだ。赤んぼうが火のついたように泣きだした。それでもとめはもどらずに、そのまま雪の中へかけだしていった。赤んぼうの声が坂をくだって遠ざかっていった。

「ねえさん、わたしいってくる。赤んぼうがかわいそうなもの。」

おふみはたまりかねたように雪の中へとびだしていった。

だが、すべてはむだだった。

とめがキリシタンをすてることを、思いとどまらせることではない。ふみが赤んぼうの声を追って庄屋（しやうや）にかけたとき、その屋敷（やしよ）にはあかあかとかがり火がもえていた。そして、もうおおぜいの役人と兵士がそこにつめかけていたのである。

庭には、きのう役所に立ててあったとおなじ東、西、南、北の旗（はた）が立てられていた。村ぐるみめしとりの準備が、もうすっかりととのって、いまにも村じゅうに出動しようとしているところだったのだ。

とめは雪の中に放心したようにすわりこんでしまった。

明治政府は、四千七百人ちかい浦上（うらかみ）の人びとを用心ぶかく三度にわけて流罪（るざい）にした。

いちばんはじめは明治元年になる年の六月、たみの父市藏（いせぞう）ら百十四名のおもだった信徒たちを「旅」におくりだした。つぎにあくる年の十二月四日七百人の浦上のほとんどの男をおくりだし、そのあくる日からつづいて女、子どもたち、のこりの家族をすべて「旅」におくりだそうとしていた。

政府は、二百五十年間ひそかに信仰（しんこう）をまもりつづけてきた浦上の信徒たちを、おそれていたからである。